俳諧

出典

▼底本　松尾芭蕉の作品は、日本古典文学大系「芭蕉句集」（大谷篤蔵・中村俊定校注、昭和三十七〔一九六二〕年、岩波書店）、与謝蕪村・小林一茶の作品は、同大系「蕪村集・一茶集」（暉峻康隆・川島つゆ校注、昭和三十四〔一九五九〕年、岩波書店）によった。表記などについては教科書としての統一した体裁に改めた。

参考文献

❊ **教師用**

▽**芭蕉に関するもの**

「芭蕉―その鑑賞と批評―」　山本健吉　新潮社　昭三十二
日本古典文学大系「芭蕉句集」　大谷篤蔵他　岩波書店　昭三十七
日本古典文学全集「松尾芭蕉集」　井本農一他　小学館　昭四十七
鑑賞日本古典文学「芭蕉」　井本農一他　角川書店　昭五十七
鑑賞日本の古典「芭蕉集」　井本農一　尚学図書　昭五十七
新潮日本古典集成「芭蕉句集」　今栄蔵　新潮社　昭五十七
「総合芭蕉事典」　栗山理一他　雄山閣出版　昭五十七
「芭蕉講座　一～五」　有精堂　昭五十七～六十
諸注評釈「新芭蕉俳句大成」　堀切実他　明治書院　平二十六

▽**蕪村・一茶に関するもの**

日本古典文学大系「蕪村集・一茶集」　暉峻康隆他　岩波書店　昭三十四
古典俳文学大系「一茶集」　丸山一彦他　集英社　昭四十五
古典俳文学大系「蕪村集」　大谷篤蔵他　集英社　昭四十七
新編日本古典文学全集「近世俳句俳文集」　雲英末雄他　小学館　平十三
「一茶秀句選」　丸山一彦　評論社　昭五十
鑑賞日本古典文学「蕪村・一茶」　清水孝之他　角川書店　昭五十一
新潮日本古典集成「与謝蕪村集」　清水孝之　新潮社　昭五十四
鑑賞日本の古典「蕪村集」　村松友次　尚学図書　昭五十六
日本の作家「人生の悲哀小林一茶」　黄色瑞華　新典社　昭五十八
「蕪村事典」　松尾靖秋他　桜楓社　平二
「一茶大事典」　矢羽勝幸　大修館書店　平五
日本の作家「戯遊の俳人与謝蕪村」　山下一海　新典社　昭六十一
日本の文学・古典編「蕪村集・一茶集」　揖斐高

ほるぷ出版　昭六十一

▽その他

「俳句大観」麻生磯次他　明治書院　昭四十六
「鑑賞日本古典文学「俳句・俳論」」白石悌三他　角川書店　昭五十二
「俳句辞典 鑑賞」松尾靖秋他　桜楓社　昭五十六
「日本名句集成」飯田龍太他　学燈社　平三
「名歌名句大事典」久保田淳・長島弘明　明治書院　平二十四

❊生徒用

「きょうの一句　名句・秀句３６５日」（新潮文庫）村上護　新潮社　平成十七
「カラー版　芭蕉、蕪村、一茶の世界」雲英末雄　美術出版社　平十九
「おくのほそ道　芭蕉・蕪村・一茶名句集」井本農一他　小学館　平二十
「芭蕉全句集」（角川ソフィア文庫）雲英末雄他　角川学芸出版　平二十二
「蕪村句集」（角川ソフィア文庫）玉城司　角川学芸出版　平成二十三
「一茶句集」（角川ソフィア文庫）玉城司　角川学芸出版　平成二十五
「俳句のきた道　芭蕉・蕪村・一茶」（岩波ジュニア新書）藤田真一　岩波書店　令和三

図版解説　**〈発句画賛〉**

出光翁美術館蔵。江戸時代中期（十七世紀）作。一幅。松尾芭蕉（一六四―九四）筆。森川許六（一六五―一七三五）画。許六は芭蕉の門人で蕉門十哲の一人。賛は「かれえたにからすのとまりけり秋のくれ」。

⇩P276

作者

松尾芭蕉

正保元（一六四四）年～元禄七（一六九四）年。名は宗房。俳号は芭蕉、別号は桃青・釣月軒・泊船堂・風羅坊など。祖父の代まで伊賀の国柘植の郷士で、父与左衛門の時代に上野に移り住んだ。二男四女の次男。

▼略歴・業績　若くして藤堂藩伊賀上野付きの侍大将藤堂良精の嫡子良忠に仕えたが寛文六（一六六六）年、良忠が病没したため退身した。良忠は蟬吟と号し北村季吟に従って俳諧を愛好していたので、芭蕉も俳諧に親しんできたが、退身後に諸学を修めるうちに俳諧で身を立てることを志すに至ったようである。寛文十二（一六七二）年、上野の天満宮に最初の撰集「貝おほひ」を奉納し、それを携えて江戸に下り出版した。江戸では小沢卜尺・杉山杉風らの援助で宗匠としての地歩を固めたが、延宝八（一六八〇）年冬に俗を避けて深川六間堀の芭蕉庵に移った。この頃、深川の臨川庵に参禅している。

天和二（一六八二）年の歳末、江戸の大火で芭蕉庵が焼失し、甲州谷村の高山麋時宅に身を寄せ、翌年冬には再建された第二次芭蕉庵に入った。この年に蕉風の発足を示す、宝井其角撰「虚栗」が刊行されている。貞享元（一六八四）年、帰省のための「野ざらし紀行」の旅をしたが、その間、名古屋の連衆と詠んだ「冬の日」五歌仙は、蕉風開眼の記念碑的撰集となった。これ以後、他界するまでの約十年間、一所不住の念をもって旅に生き、そして充実した俳諧活動に明け暮れた。貞享四（一六八七）年八月の常陸鹿島への「鹿島紀行」の旅、十月から貞享五〔（一六八八）＝元禄元〕年四月にかけて郷里から吉野、須磨・明石などを訪れた「笈の小文」の旅、貞享五年八月名古屋より木曽路を経て江戸に帰着する「更科紀行」の旅、元禄二（一六八九）年の「奥の細道」の旅と、立て続けに旅行をした。引き続いて、伊勢・近江・伊賀・京などに滞在して、「幻住庵記」「嵯峨日記」などを草した。芭蕉の指導のもとに成立した去来・凡兆撰「猿蓑」は元禄四（一六九一）年七月に出版されたが、重厚閑雅な「さび・しをり」の句境を示している。同年冬に江戸に帰り、翌年第三次芭蕉庵に入ったが、元禄七（一六九四）年には西国への旅に出発し、その途中の大阪で病となり、十月十二日に没した。生前の六月に最晩年に追い求めた、枯淡軽快の趣の「軽み」の俳風を見せる野坡ら撰「炭俵」が出版された。

こうして芭蕉一門の達成した蕉風俳諧は、「芭蕉七部集」（冬の日・春の日・曠野・ひさご・猿蓑・炭俵・続猿蓑）と総称される代表的撰集七つに集約されている。

品詞分解と現代語訳

かれ枝（えだ）　に　烏（からす）　の　とまり　けり　秋（あき）　の　暮（くれ）
（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）
格助・場所　格助・主格　ラ四・用　詠・終　格助・体修

葉の落ちた木の枝に烏がとまっている。いかにも秋の夕暮れらしい景色である。

《主題》

秋の夕暮れに、葉の落ちた枝に黒々とした烏がとまっている。その景色に、いかにも秋の夕暮れらしい気分を感じる。

指導上の注意点と発問例

●二七六ページ

問 ◉**「秋の暮」（２行目）の句が最後に置かれることで、どのような効果が生まれているか。**

答 枯れ枝と烏の取り合わせが醸し出す気分が、秋の夕暮れの気分として印象づけられる効果が生まれている。

補 語順を変えて、「秋の暮かれ枝に烏のとまりけり」としてみる。秋の夕暮れと枯れ枝に烏がとまっている景色を詠んでいる点では、もとの句と同じである。ただし、この形にすると〈秋の夕暮れに、枯れ枝に烏がとまっている〉という意味の、やや説明的な表現になる。

これに比べると、「かれ枝に烏のとまりけり秋の暮」は、「けり」が切れ字で、「とまりけり」と「秋の暮」の間に明確な「切れ」がある。「切れ」は、その下に置かれる言葉に焦点をあてる効果がある。「切れ」の後に「秋の暮」を置くことで、句の中心が秋の夕暮れにあるということが明瞭になる。

語句の研究

●二七六ページ

２かれ枝　葉の落ちた枝と、枯死した木の枝という二つの意味がある。葉の落ちた枝という意味の「かれ枝」は冬の季語である。「秋の暮」の句に「かれ枝」を詠むのは季重なりであるが、この句の眼目は「枯木寒鴉」という冬の画題を素材として「秋の暮」を詠んだ点にある。「鑑賞」参照。

２秋の暮れ　秋の夕暮れと、秋という季節の終わりという二つの意味がある。ここでは秋の夕暮れという意味でとらえる。『あら野』ではこの句を仲秋の部に収めている。

鑑賞

季語は「秋の暮」で秋。切れ字は「けり」。初出の『東日記』（延宝九〈一六八一〉年刊）では、中七は「烏のとまりたるや」であったが、『あら野』（元禄二〈一六八九〉年刊）には「烏のとまりけり」の形で収められている。

水墨画の画題に「枯木寒鴉」がある。葉の落ちた木に烏がとまっているさまを描くもので、冬の画題である。この句はこの画題

を素材として、秋の夕暮れの気分を表現している。芭蕉の弟子の許六にこの画題の水墨画があり、芭蕉は画賛としてこの句を記している（二七六ページ図版参照）。

中世の和歌では、「さびしさはその色としもなかりけり槙立つ山の秋の夕暮れ」（寂蓮）、「見渡せば花も紅葉もなかりけり裏の苫屋の秋の夕暮れ」（定家、二六三ページ）のように、秋の夕暮れは華やかさのない、寂しい気分を醸し出すものとして詠まれてきた。この句はその伝統を継承しつつ、枯れ枝と烏の取り合わせに秋の夕暮れの寂しさを見いだしている。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

大津（おほつ）　に　至（いた）る　道（みち）、　山路（やまぢ）　を　越（こ）え　て
格助・帰着　ラ四・体　格助・経場　ヤ下二・用　接助・単接

山路（やまぢ）　来（き）　て　何（なに）やら　ゆかし　すみれ草（ぐさ）
カ変・用　接助・単接　副　形シク・終

山路を歩いていると、ふと道の傍らにすみれの花が咲いているのを見つけた。その可憐（かれん）で美しい姿を目にすると、私の心は何とはなしに引き付けられて、つい立ち止まって見入ってしまったことだ。

《**主題**》

山道の傍らに咲いているすみれ草の可憐さを詠む。

指導上の注意点と発問例

●二七六ページ

問　**「何やらゆかし」（3行目）は、作者のどのような気持ちを表しているか。**

答　理屈ではなく、感覚的にすみれの花に魅了された気持ちを表す。どこでもそういう気持ちになるのではなく、「山路」だからである。初案は日本武尊の魂が白鳥と化して舞い降りた地である、熱田（あつた）の白鳥山（しらとりやま）で詠まれた。御陵のすみれ草をゆかしく思う気持ちは、日本武尊への畏敬の念から発したものだろうが、「何やらゆかしすみれ草」という思いが普遍的との思いに至った時、「山路」が最適と考えたのである。

鑑賞

季語は「すみれ草」で春。貞享二（一六八五）年三月、作者四十二歳の作。「野ざらし紀行」所収。山口素堂が「山路きてのすみれ、道ばたのむくげこそ、この吟行の秀逸なるべけれ」と、本句を評価している（「野ざらし紀行」序）。しかし、この句の初案は「鑞箱物語」や「熱田三歌仙」所収の「何とはなしに何やらゆかしすみれ草」であるが、詠まれた場所は大津に至る道ではなく、尾張の国熱田（愛知県名古屋市熱田区）の白鳥山法持寺（ほうじじ）なのである。つまり、貞享二年三月下旬に大津から江戸に下る途次、熱田に立ち寄り、同地で三月二十七日に蕉門の俳人と三吟歌仙を巻いた。その折の発句が初案の形だったのである。それを初五を「山路来

語句の研究

●二七六ページ

3大津に至る道…　「野ざらし紀行」の前書き。「野ざらし紀行」の旅で、京都の山科辺から山を越えて大津に出たのである。「大津」は現在の滋賀県大津市。

て」に変えて、京都から大津に下る山路の折の吟に変更した。「山路」の「すみれ」は伝統的な和歌・連歌の世界ではあまり詠まれない取り合わせである。このことは早く北村湖春（季吟の長男）が指摘しているが、芭蕉はそういう規範的な見方から逸脱し、新たな詩的美を求めていたし、また、その点にこそ俳諧の生命を見出していた。山路の途中に、可憐で美しいすみれを見出し、人を引き付けずにはおかない花の姿を詠出したのである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

旅に　病ん　で　夢は　枯野を　かけめぐる
格助・場所　マ四・用（撥音）　接助・単接　係助・区別　格助・経場　ラ四・終

旅先で病に伏している。その夜々の夢に、寒々と枯れ果てた野末を旅行く自分の姿を見ることだ。

病中吟

《主題》

旅中に病気をして、なお旅する夢を見る自己を詠む。

指導上の注意点と発問例

●二七六ページ

問 **「夢は枯野をかけめぐる」（6行目）とあるが、作者のどのような心境が感じられるか。**

答 旅への強い欲望。

補 病中の夢うつつの幻に、枯れ野をさまよい歩く自分の姿を見たことを、風雅への妄執として捉えている。

語句の研究

●二七六ページ

5病中吟　元禄七（一六九四）年十月八日、旅先の難波（現在の大阪市の古称）で病中に詠んだ句。四日後に没し、最後の句となった。

6旅に病んで　この「旅」は、元禄七（一六九四）年五月、江戸を立って伊賀上野に帰った後、湖南・京・伊賀の間を往復し、九月八日、伊賀を立って重陽の節句を奈良で迎え、その日のうちに大坂に入ったもので、実体のあまりない「旅」である。江戸での送別のさまを記した「陸奥衝」に、「此度は西国にわたり長崎にしばし足をとめて」とあるところを「夢は枯野を」と結び付ける解もあるが、かつて思い立った西国行きの話が、江戸を立つに当たって、口にのぼったという程度で、実際に計画されたものではないようである。また、「芭蕉翁終焉記」に、「…心細き夢のさめたるは」と言ってこの句を示し、「是さへ妄執ながら、風雅の上に死なん身の道を切に思ふ也と、悔まれし。」とある。

深夜に及んで、介抱に努めていた呑舟を召して、書き取らせたのがこの句である。

詞書も芭蕉が指示したものを書き留めたようなので、文字どおり「病中」の思いを詠んだものであって、いわゆる辞世吟ではない。しかし、芭蕉最後の作となったことは事実であり、死を予期

鑑賞

季語は「枯野」で冬。元禄七（一六九四）年十月八日、芭蕉最後の詠句。「笈日記」などに所収。芭蕉は大坂の之道宅に滞在中、九月二十九日より病の床に伏し、次第に容態は悪化し、十月八日の

した悲痛な心境が感得できるわけで、辞世の句にふさわしいと言える。「笈日記」によれば、この句を書き取らせた後に支考を呼んで、「なほかけ廻る夢心」という別案を示した。支考は初五文字を聞きたく思ったが、病状を考えて質問を控えていると、芭蕉は自ら「生死の転変を前におきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠て、年もやや半百に過ぎたれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の声におどろく。是を仏の妄執といましめ給へる、ただちに今の身の上におぼえ侍る也。此後はただ生前の俳諧をわすれむとのみおもふは」と述懐している。死を目前にしながらも俳諧にひかれる我が身を嘆き、これ以後は俳諧を忘れようと返す返す悔んだというのである。

この句によって芭蕉が、迫り来る死を前にしてまで俳諧に執着し、俳諧の道の追求に欠くことができない「旅」を続けたいという意志が察せられる。それと同時に、これ以後、詠句がないことは、死を覚悟して、「妄執」から抜け出ようとする芭蕉の意志を示していると言えよう。

作者

与謝蕪村

享保元（一七一六）年～天明三（一七八三）年。俳人・画家。本姓は谷口。名は寅（または、画家としての署名にも用いている長庚を名とする説もある）。別号、宰町・宰鳥・落日庵・夜半亭・夜半翁など。画号としては、四明・子漢・長庚・春星・謝寅・三菓軒など。摂津の国東成郡毛馬村（現在の大阪府都島区毛馬町）の生まれ。家は富裕な農家と推測されるが、出自などの詳細は不明である。

▼略歴・業績　享保の末年、江戸に出て画・俳に志した。京都で俳諧活動を行っていた夜半亭早野巴人（宋阿）が元文二（一七三七）年に江戸に戻り、この巴人のもとで俳諧を修業し、宰町と号して次第に頭角を現した。寛保二（一七四二）年に師宋阿が没してからは、下総の国結城の砂岡雁宕に誘われて、結城・下館・宇都宮などの北関東地方の同門のもとに身を寄せ、その後十年間、奥州にまで足を伸ばす放浪生活の中で、画・俳を磨いた。その間に号を蕪村と改めた。

宝暦元（一七五一）年に帰京、丹後の国宮津に滞在した四年間を挟んで、明和（一七六四～一七七二）初年までは、画を専らとし俳を従とする生き方で、漢画の強い影響を脱した、与謝風と言われる独自の文人画の世界を確立した。明和年間に入ると、夜半亭門流の中で次第に中心的存在となっていき、明和三（一七六六）年には、炭太祇・黒柳召波らと三菓社を結成し、やがて同七年には夜半亭二世を継いで、中興期の京都俳壇の中心に立った。その清新で浪漫的な句風は大いに世に受け入れられ、後継者となった高井几董らのみならず、尾張の加藤暁台、金沢の堀麦水、伊勢の三浦樗良、江戸の大島蓼太など、中興俳諧の旗手たちと交流しながら、明和・安永期（一七七二～一七八一）の充実した俳壇を導いた。六十歳頃から病を訴えることが多くなるが、安永六（一七七七）年には、「春風馬堤曲」を収める「夜半楽」や句日記「新花摘」を、同九年には蕪村連句の代表作である几董との両吟歌仙「桃李」を成すなど、円熟した活動を残した。天明に入ると、やや衰えを示し、同三年十二月二十五日に六十八歳で亡くなった。遺骨は、「我も死して碑にほとりせん枯尾花」という生前の希望どおり、洛東一乗寺村の金福寺芭蕉庵牆外に納められた。蕪村一門の代表的撰集を「蕪村七部集」と総称するが、「其雪影」「明烏」「一夜四歌仙」「花鳥編」「続一夜四歌仙」「桃李」「続明烏」「五車反古」の八部を収める。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

春（はる）　の　海（うみ）　ひねもす　のたりのたり　かな

格助・体修　副　終助・詠嘆

春の海を眼前に眺めると、海は大きな広がりをみせているが、そこでは一日中のたりのたりと波が上下して打ち寄せている。いかにものどかである。

指導上の注意点と発問例

《主題》

春の海の春らしい穏やかさ、ゆったりとした感じを詠む。

●二七七ページ

問　「のたりのたり」（２行目）はこの句の中でどのような表現上の効果があるか。

答　「のたりのたり」という擬態語がゆるやかな音調で緩慢な波の様子を的確に表現しているが、「のたり」を繰り返すことで、ゆったりとした感じがいっそう増している。

鑑賞

季語は「春の海」で春。宝暦十二（一七六二）年以前の作。「須磨の浦にて」と前書のある撰集もある（「俳諧金花伝（はいかいきんかでん）」）ので、須磨で詠んだもの。「のたりのたり」でゆったりした様子を示すとともに、「一日中」の意の「ひねもす」という雅語表現が加わることで、春の海ののどかさ、緩慢さを表している。「のたりのたり」は、波の磯に打ち寄せる様子と見る説と、沖で波が緩慢な動きを見せている様子と見る説とがあるが、どちらとも限定せず、「春の海全体を形容したもの」（「名句集成」）と考えていい。本句には「春の海」「ひねもす」「のたりのたり」だけしか使われていないが、実際には「波」が大きく浮かんでくる表現になっている。

語句の研究

●二七七ページ

２のたりのたり　「のたり」は四段動詞「のたる」の連用形からきているもので、うねるように進む意であるが、ここにも緩慢にではあるが波が進んでいる気分が込められている。

品詞分解と現代語訳

五月雨（さみだれ）　や　大河（たいが）　を　前（まへ）　に　家二軒（いへにけん）
問助・詠嘆　格助・対象　格助・状態

五月雨が降り続き、水かさを増し濁流となってすさまじい勢いで流れる大河を前に、ただ二軒の家が不安げに寄り添うように建っている。

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

《主題》

大河の濁流を前にして、二軒の家が不安気に寄り添っている情景を詠む。

指導上の注意点と発問例

●二七六ページ

問　◉「五月雨や」（3行目）の句は、どのような情景を描いているか。

答　五月雨が降り続いて水かさの増した大河を前に、たった二軒の家が建っている、心細さを感じさせる情景。

補　「二軒」ではなく「一軒」あるいは「三軒」だと、印象はどのように変わるだろうか。一軒では孤立している感じが強くなる。三軒では危うい感じが薄れるだろう。二軒であるからこそ、不安で心細い感じが伝わってくる。

語句の研究

●二七六ページ

3 五月雨　陰暦五月頃降り続く長雨。梅雨。季語。

鑑賞

季語は「五月雨」で夏。安永六（一七七）年五月十日、夜半亭月並句会での作。「蕪村句集」に所収。本句は兼題の一つ「五月雨」に対して詠んだものである。凄まじい五月雨によって大河が氾濫しそうな様子が見えて、川端にある二軒の家が不安気に寄り添っている情景を映し取っている。強大な力を振るう自然と、それに対峙する人間の生活という構図で、いかにも画家蕪村の目を感じさせる絵画的な句である。「家二軒」は、危難の前に弱小のものが寄り添う感じがよく出る、実に絶妙な配置で、一軒では孤立に過ぎるし、三軒ないしそれ以上では危うい感じが消えてしまうのである。同じ蕪村の五月雨の句に「五月雨や御豆（歌枕の御豆の御牧のこと）の小家の寝覚がち」（明和六年）がある。川の氾濫を危惧する人間とその生活を詠んでいることは同じであるが、迫力などの点で本句のほうが勝っていることは言うまでもあるまい。

この句はただ単に五月雨を詠んだ叙景句ではないとする説がある（新潮日本古典集成など）。五月雨の降りしきる大河を前にした人々の不安を詠んでいるが、それは蕪村自身の心象を反映して

いるというのである。蕪村の不安とは、安永五年十二月に結婚した一人娘「くの」が翌六年五月に離婚したことである。五月二十四日付の正名・春作宛の書簡で、婚家が金儲けを専らにし、家風が合わないことで娘が病気がちなことから、「金も命ありての事と不便に存じ候て、やがて取りもどし申し候。」と述べているが、その書簡中の末尾に本句が「涼しさや鐘を離るる鐘の声」などとともに書き付けられている。この二句について「右は当時流行の調にては無之候。」と注記があって、蕪村はこの当時流行の句風を叙景句と捉えているから、本句が単なる叙景を詠んでいるとは考え難く、娘の離縁と関連付けるのが妥当だと言う。確かに蕪村の心象風景を描いているという見解には説得力もある。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

牡丹（ぼたん）　散（ち）つ　て　うち重（かさ）なり　ぬ　二三片（にさんぺん）
ラ四・用（促音）　接助・単接　ラ四・用　完・終

絢爛豪華に咲き続けた牡丹の花も散り落ちて、その花びらの二、三枚が黒い土の上に重なっている。

《主題》

華やかな牡丹の花が散って、重なった情景を詠む。

指導上の注意点と発問例

●二七七ページ

問　「二三片」（4行目）とは、何を表すのか。

答　牡丹の花の花びら二、三枚。

補　蕪村の門人の几董（きとう）は「二三片とかたう文字を遣（つか）ふたは、題の牡丹に取り合はせし趣向なり」（「附合（つけあい）てびき蔓（づる）」）と述べ、「牡丹」という題が、硬い漢語を使うのにふさわしいことによる趣向だとしている。

語句の研究

●二七七ページ

4 散つて　「俳諧新選」などには「散て」と表記してある。ここから「散つて」か「散りて」と読むかという問題が生じる。河東碧梧桐（かわひがしへきごとう）が紹介した蕪村の几董宛書簡（安永九〔一七八〇〕年七月二十五日付）の中に「ぼたんちりて」と仮名で記されているという。この書簡自体は未確認であるが、近年は「散りて」として解する書もある（「日本名句集成」など）。ここでは従来どおり、「散つて」を採用した。

鑑賞

季語は「牡丹」で夏。安永元（一七七二）年以前の作。「俳諧新選」所収。「牡丹散つて」は「語句の研究」に記したように、読み方にも問題があるが、さらに解釈も、「牡丹がすでに散っていて」とも「牡丹が今散って」とも考えられるのである。実は解釈は読み方とも関連していて、「牡丹散つて」であれば、かなり語調が強く感じられるので、作者の目前に牡丹の花びらが散る景を詠んだと見てもよい。ところが、「牡丹散りて」となると、ややゆったりした表現となり、花びらが一ひらずつ徐々に落ちてゆき、その結果として、眼前にうち重なっている花びらがある、というように解することもできよう。

几董は「附合てびき蔓」の中でこの句について、時節を四月二十日頃、時刻を有明月のある早暁、散った牡丹の上に露などがきらきらしている状況と考えて、脇句を付けたと述べている。連句の中で脇句を付ける人物の解釈が、発句の詠者の心を正しく読み取っているとは限らないが、参考にはなるだろう。

蕪村には「牡丹切つて気のおとろひし夕べかな」など牡丹を詠んだ名句が多いが、本句はその中でも代表的な作である。

作者

小林一茶

宝暦十三（一七六三）年～文政十（一八二七）年。俳人。名は弥太郎・信之。別号、圮橋・雲外・俳諧寺など。信濃の国水内郡柏原村（現在の長野県上水内郡信濃町）の農家、弥五兵衛の長男。

▼略歴・業績　三歳のときに生母と死別、祖母の手で育つが、八歳のとき、継母が来て義弟仙六（後、弥兵衛）が生まれ、その後、家庭内に不和が絶えなかった。十五歳頃江戸に出て、住み込みの店員のような境遇に入り、苦労したようであるが、その後、約十年間の消息は分からない。天明五（一七八五）年頃から葛飾派の二六庵竹阿の門で俳諧を学んでいたらしいが、寛政二（一七九〇）年に竹阿が大坂で没すると、渭浜庵素丸の門に転じた。翌寛政三年に老父を見舞うために帰郷して「寛政三年紀行」を著し、同四年、京坂から四国・九州へ俳諧行脚をし、京の闌更、大坂の大江丸らと交渉を持ち、句帖を残した。飄逸洒脱な言行や句風をもって江戸俳壇に特異な存在として認められるようになったが、宗匠として一家をなすことなく、一茶を後援した夏目成美の家に寄食したり、房総方面に散在する門人のもとを転々するなど、放浪の境涯に生きた。

享和元（一八〇一）年、久しぶりに帰郷したとき、父が急病で亡くなったが、その枕頭に侍して、父子の情と継母・異母弟仙六との葛藤を書き綴った「父の終焉日記」を刊行している。その後、江戸に戻った一茶は、財産を一茶と仙六とで二分するようにという父の遺言を履行しない異母弟との間に長い相続争いを続けることになる。和解が成立したのは文化十（一八一三）年で、一茶五十一歳のときであった。翌年、江戸を引き払って帰郷、初めて妻帯して落ち着いた家庭の人になったが、生まれた子は次々に死亡、妻とも死別、再婚した妻とは離婚するなど、ついに世間並みの幸せというべきものを味わうことなく終わった。六十五歳の夏、火災に遭い、焼け残りの土蔵の中で、その冬十一月十九日、再度の中風の発作で没した。

一茶には、日常の見聞や活動、また特に句作などを克明に筆録する性癖があって、前記の句帖に始まり、享和・文化の頃から晩年に至る句帖は「享和句帖」「文化句帖」「七番日記」「八番日記」「九番日記」の名で刊行されている。また、これらに対して、一茶が生前に刊行を予定してまとめた唯一の句文集に「おらが春」があり、代表作として読まれている。

品詞分解と現代語訳

有明(ありあけ)　や　浅間(あさま)　の　霧(きり)　が　膳(ぜん)　を　はふ
間助・詠嘆　格助・体修　格助・主格　格助・経場　八四・終

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

軽井沢の旅宿の早朝、有明の月が、まだ、淡く消え残っている頃、食膳についていると、浅間の山すそからわく霧が、部屋の中に煙のように流れ込んできて、食膳の辺りをはうようにしていることだ。

《主題》
旅宿の朝食の膳に霧がはい回る様子を詠む。

指導上の注意点と発問例

●二七七ページ

問 ◉「霧が膳をはふ」（6行目）とは、どのような様子か。

答 浅間山の霧が部屋の中にまで入り込み、食事の膳の周りに漂っている様子。

補 旅宿の部屋に霧が入り込むという、旅先で見た光景を詠んでいる。霧が生きもののように漂う様子を、「はふ」という動詞を使うことで的確に表現している。

問 「有明に」ではなく「有明や」とすることで、どのような効果が生まれているか。

答 「有明に」の場合は、単に「早朝に」という意味になるが、「有明や」として切れを入れることで、「有明」に焦点をあてる効果が生まれている。

補 「有明」に焦点をあて、「霧が膳をはふ」様子を、いかにも浅間山の山麓の早朝らしい光景として詠んでいる。

語句の研究

●二七七ページ

6有明や　夜が明けて空に白く見えている月を有明と言うので、ここは、夜が明けそめた早朝の光景である。なお、「有明」を有明行灯(あんどん)と解する説もあるが、一茶の句例は「有明やさらしな山も通りがけ」のように、全て有明月を指している。

6浅間　浅間山。現在の群馬県と長野県との境にある山。

6膳　朝食の膳。旅宿で、早立ちのために、早朝に食膳についているのである。

鑑賞

季語は「霧」で秋。「七番日記」所収。文化九（一八一二）年七月、作者五十歳の作。一茶の句文集「株番(かぶばん)」所収句には「軽井沢」と前書きがある。江戸と郷里とを何度か往復した一茶には、なじみになっている宿場の情景である。文化九年六月十二日に江戸を出発し、遺産問題の折衝のため約二か月柏原に滞在、そして、江戸に戻っている。往きは六月十五日、帰りは八月十四日に軽井沢を

通過している。「七番日記」には、七月の部の終わりにこの句が記されているので、往路での印象を詠んだものかと言う。

デッサンのしっかりした、的確な叙景の句である。「有明」「浅間の霧」と、やや平板に事実を提起したのを受けて、「膳をはふ」が動的な描写となっていると同時に、「有明」「浅間の霧」を生き生きした具象性を伴うイメージに活かしている。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

十二月二十四日、故郷に入る
　　格助・帰着　ラ四・終

これ　が　まあ　つひ　の　栖　か　雪五尺
代　格助・主格　感　格助・体修　終助・詠嘆

かねがね自分の最後の住みかと思い定めていた故郷へ帰ってきてみると、なんと五尺もの雪に深く閉ざされた世界である。見慣れている土地とはいえ、我が余生を送る土地かと思うと、感無量である。

《主題》
故郷の雪国に永住する気持ちを詠む。

指導上の注意点と発問例

●二七七ページ
問 故郷を「つひの栖」（7行目）と言っているのは、なぜか。
答 柏原は生まれ故郷とはいえ、長い間不本意な争いの対象になってしまっていたので、今回はどんなことがあっても郷里に落ち着こうという決意で帰郷した。それで「つひの栖」という表現が出たのである。

語句の研究

●二七七ページ
7十二月二十四日　文化九（一八一二）年八月に一度江戸に帰ってから、同十一月十七日、今回こそ遺産問題にけりをつけようとの決意で柏原に赴いた。十一月末に柏原に着き、約一か月間、近村を巡った後、借家を決めて腰を据えて交渉に入ろうとしたのが十二月二十四日であった。
7故郷　信濃の国柏原（現在の長野県上水内郡信濃町）のこと。
7五尺　「尺」は長さの単位。一尺は約三〇・三センチメートル。

鑑賞

季語は「雪」で冬。文化九年十二月二十四日、作者五十歳の作。「成美評句稿」所収。「七番日記」にも収めるが、前書きはなく、文化九年十一月の部に入っている。江戸の成美に送った句稿には、中七に「つひの栖か」「死所かよ」の両案が併記されており、成美は「死所かよ」を消し、「つひの栖か」に「極上々吉」という高い評価を与えている。嘆きの肉声を発したような主題の句に

あって、「死所かよ」はあまりに生の響きで、膨らみに欠けるが、伝統の歌語でもある「つひの栖」は、暗く沈んだ情調をほどよく受け止める重さがある。「『是（これ）がまあ』という嗟嘆に発し、『つひの栖か』という暗いイメージに転じ、結句を『雪五尺』と具象的に据えた格調は大きくひきしまっており、隙間がない。」（栗山理一「日本詩人選」）という評は、この句のリズムを指摘したものだが、確かに、結句の「雪五尺」と五・七の激しい主観との緊張が一句の眼目である。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

蛙戦ひ　見に　まかる、　四月二十日　なり　けり
上二・用　格助・目的　ラ四・終(ℐ)作者→読者　断・用　過・終

痩せ蛙　まける　な　一茶　これ　に　あり
カ下二・体　終助・禁止　格助・場所　ラ変・終

痩せ蛙よ、他の蛙との戦いに負けるな。一茶はここにいて、応援しているぞ。

《主題》

蛙同士の戦いのなかに痩せた蛙がいるのを見つけて、声援を送る。

指導上の注意点と発問例

●二七七ページ

問 **「まけるな」と口語調の表現を用いていることで、どのような効果が生まれているか。**

答 非力に見える「痩せ蛙」を応援する作者の気持ちが直接的に伝わってくる効果が生まれている。

補 この句や「これがまあつひの栖か雪五尺」（二七七ページ）の「これがまあ」のように、一茶の句では口語調の表現が効果的に用いられている。

「まけるな」は、蛙の戦いを見ながら心の中で声援を送っていると考えてもよいだろう。

鑑賞

季語は「蛙」で春。『希杖本一茶句集』では、前書きは「武蔵の国竹の塚といふに、蛙たたかひありけるに見にまかる、四月廿日なりけり」とある（『俳句大観』明治書院、一九七一年）。竹の塚は武蔵国足立郡に属する。この句は『七番日記』では文化十三年（一八一六）の部に収められているが、同年四月に一茶は信州にいた。ゆえに、「江戸流寓中の体験によった回想の句か」とする説もある（前掲『俳句大観』）。

「蛙戦ひ」は蛙いくさ、蛙合戦ともいう。蛙が交尾の時期に集まって争うさまを合戦に見立てたものである。時季は夏であり、前書きに四月（陰暦四月）とあることと符合する。「蛙」は季語としては春であるが、この句は実質的には夏の句である。

前書きに「見にまかる」とあることから、一茶はたまたま蛙の

語句の研究

●二七七ページ

9 蛙戦ひ　多くの蛙が集まり、争って交尾するさま。雌をめぐって雄同士が戦っているように見えることから、このように言う。

9 これにあり　ここにいるぞ。自分がついているぞ、と痩せ蛙に呼びかけている。

戦いを目撃したのではなく、わざわざ見に行ったと考えられる。見物しながら痩せ蛙に肩入れするところに、弱いものに寄せる思いがあらわれている。それは一茶の「我と来て遊べや親のない雀」といった句にも通じるものであろう。